トピックス

「DAAD 連邦議会選挙視察研修 2017」に参加して

川村陶子

1　はじめに：学術交流機関が選挙監視団を派遣？

日本のドイツ研究者にとって，ドイツ学術交流会（DAAD）といえば，同国の大学へ留学する際に奨学金を提供してくれる公的学術交流機関である。ドイツ国外の大学にドイツ語やゲルマニスティクの講師を派遣する活動でも知られている。その DAAD が本国の連邦議会選挙に際し，国際的な視察研修団を組織していることをご存知の読者は，おそらく多くないであろう。Wahlbeobachterreise と銘打ったこの事業は，過去60年間にわたり，ほぼ 4 年に 1 度の連邦議会選挙にあわせて実施されている。

筆者は，2017年連邦議会選挙への DAAD 視察研修に，日本代表として参加する幸運に恵まれた。9 月24日の投開票の前後11日間，世界各国の同僚たちと一緒にドイツの主要都市をめぐり，選挙戦を間近で観察すると同時に，ドイツの政党やメディアの関係者と面会し，選挙の主要テーマに関して専門家と意見交換を行った。

本トピックスでは，当研修事業の概要を紹介し，筆者が体験した2017年の視察をふり返るとともに，日本人参加者の視点からドイツの政治と選挙をめぐる若干の考察を行う。最後に，DAAD が当事業を実施する意義についても考えたい。

選挙視察団の集合写真（ドイツ連邦共和国歴史の家にて。右から 4 人目が著者）

本稿では，研修事業の名称を「(連邦議会) 選挙視察研修 (事業)」と表記する。ドイツ語名称 Wahlbeobachterreise は，直訳すると「選挙監視員旅行」「選挙監視団」などとなろう。しかし，今日行われている事業は，国連が派遣する選挙監視団のように選挙の公正性を外部の目でチェックするというよりも，外国人にドイツの選挙や政治に対する理解を深めてもらう性格が強い。このため，視察研修という語を用いることとした。

2　研修の概要

選挙視察研修事業は，1957年，戦後3回目の連邦議会選挙の時に始まったとされる。曖昧な表記をしたのは，当事業の開始経緯や実施状況について，正確に記録した公式報告が存在しないからである。DAAD の過去の年報をひもとくと，1957年連邦議会選挙の際，レバノンのベイルート・アメリカン大学の法学・国家学部から学生視察団を招き，成功を収めたとの記録がある (DAAD-Jahresbericht 1956/57: 41-42)。その後も連邦議会や州議会の選挙にあわせる形で，米国，西欧・北欧諸国，中国 (国交回復後) などから視察団が招聘された。1994年連邦議会選挙以降は「国際選挙視察研修団 (Internationale Wahlkampfbeobachter ないし Internationale Wahlbeobachter)」の名称で，複数国から原則1名ずつの代表で構成するグループが連邦議会選挙を視察する形が定着した。なお，DAAD 本部関係者からは，以前に連邦共和国外務省も同種事業を主催していたようだとの話を耳にしたが，確たる証拠は見つけられなかった。

詳細はともあれ，連邦政府が広義に関与する形で，世界各地から「ドイツ専門家 (Deutschland-Experten)」を集めて連邦議会選挙を視察させる事業が，西ドイツ誕生後間もない時期から続いていることは確かである。事業が開始された背景には，ナチ・ドイツの記憶が新しかった時代に，連邦共和国で民主主義が根づいていることを諸外国に示す意図があったと推測される。事業名称として選挙監視員 (Wahlbeobachter) という語が採用されたのも，外国人に選挙を見てもらうことで「機能する民主主義 (funktionierende Demokratie)」を世界にアピールしたいとの意向ゆえであろう。

今回 DAAD 本部のご厚意で，2002年以降の視察研修参加者に配布されたプログラムの抜粋を閲覧できた (Wahlbeobachterreise Programm 2002, 2005, 2009, 2013)。そこに記された情報を総合すると，2000年代以降の事業は，ほぼ一定の型に沿って実施されている。

日程は全体で11～12日間，実質的活動は投開票日の約10日前に始まり，投開票の翌日に終了する。視察団は東西ドイツの6～8都市を巡回し，各地で主要政党の集会等のイベントを見学するほか，政党・メディア・市民団体等の代表者やドイツ側研究者と面会し意見交換する。最後は首都ベルリンに滞在し，投票日には

地元の投票所を見学，夜は主要政党等の選挙パーティー（Wahlparty）で開票速報を見守り，関係者の反応を観察する。日程終盤にはパネルディスカッションが催され，参加者の代表が視察の印象をドイツ側メディアや学術交流関係者に披露する。国際ドイツ政治研究学会（IASGP）関係者や若手研究者のグループで別枠の視察団が組織され，DAAD 視察団と意見交換している年もあった。

参加メンバーは，2002年には10カ国出身の10名であったが，2009年以降は出身国・人数とも 2 倍近くに増えている（2005年の参加者データは不明）。半数前後が欧米諸国と東欧・ロシアから，残りが中南米，中東，アジア，アフリカからで，大洋州からの参加者はいなかった。ほぼ全員が広義のドイツ研究者で，大学や研究所に所属している。専門は政治や法律，国際関係などの社会科学系が多いが，歴史家やゲルマニストも含まれる。年齢は30代から60歳近くまでと多様で，平均50歳前後である。視察団には必ずドイツ人の政治学者が 1 名，学術コーディネイターとして付き添い，導入講義や訪問先での司会を行う。2002年にはベルリン自由大学のハートムート・イェッケル（Hartmut Jäckel）教授，2005年以降はフライブルク大学のウルリヒ・アイト（Ulrich Eith）教授がその役を務めている。

2017年の今回は，アイト教授の統括の下，16カ国18名のメンバーが集められた。内訳は西欧 5 名（うちフランス 2 名），東欧・ロシア 4 名（うちロシア 2 名），中東（トルコ含む）3 名，北米 1 名，中南米 2 名，アジア 3 名で，約半数の 8 名が女性であった。日程は2017年 9 月15～25日の11日間で，列車とバスを使って旧西独地域 3 都市（ボン，ケルン，フランクフルト），旧東独地域 2 都市（ハレ，ライプツィヒ）を訪ね，後半 5 日間はベルリンに滞在し，毎日 3 ～ 5 つの活動をこなした。午前と午後で異なる都市を周りながら計 7 名の政治家と会見，夜はバスでさらに別の場所へ長距離移動という日もあった。ほぼすべての活動で討論の時間があり，異なるテーマに関する新しい知見にふれ，その場で批判的議論を行う。知力も体力も要求されるハードスケジュールであった。

3　11日間の活動

2017年連邦議会選挙の視察研修活動は，大きく⑴選挙戦自体の視察，⑵政党・メディア関係者との面会，⑶選挙の主要テーマに関する専門家のレクチャーと意見交換，⑷施設見学（ボンの「連邦共和国歴史の家」とベルリンの CDU 選挙情報センター），⑸総括（パネルディスカッション等）の 5 つの種類に分けられる。プログラムの中心は⑴⑵⑶で，時間的にもこれら 3 種がほぼ同じ割合で配分されていた。以下，3 つのジャンルについて，盛りだくさんの活動の中でとくに印象に残ったものをふり返りたい。

⑴　選挙戦の視察

選挙視察のハイライトは，政党の選挙集会や開票パーティーといった大規模イ

ベントの見学である。大都市での選挙集会視察は，過去には研修活動の中心を占め，全主要政党の集会を網羅した年もあったが，今回は3政党に絞って訪問した。カリスマ的人気でFDPを復活させたリントナー（Christian Lindner），女性筆頭候補として注目された左翼党のヴァーゲンクネヒト（Sarah Wagenknecht），ジャンダルメンマルクトで最後の訴えに立ったSPDのシュルツ（Martin Schulz）の演説は，それぞれ個性と熱意にあふれていた。聴衆の構成や会場の雰囲気はさまざまで，たとえばFDPの集会は高校生くらいの若者や若い親子連れが目立ち，演説の要所で学生風のサポーターが「リントナー」と書いたミニ横断幕を広げるなど，ポップアイドルのコンサートのような軽やかな楽しさが漂っていた。

選挙パーティーも視察日程の最後を飾る重要イベントである。今回，視察団は数名ずつに分かれ，FDPとAfDを除く主要政党，およびバーデン＝ヴュルテンベルク（BW）州代表部のパーティーに出席した。筆者はアイト教授らと一緒に同教授の地元BW州の催しに参加したが，ティアガルテンの代表部でのパーティーは大使館レセプションのような雰囲気であった。18時に最初の開票速報が出た時には，二大政党の後退とAfDの躍進に会場から大きなため息がもれたが，その後は終始和やかな空気が流れ，フラムクーヘンやシュペッツレなどの地方料理を皆で楽しみ，選挙の夜を祝うムードが強かった。他の主要政党のパーティーはもう少し緊迫感があったようだが，参加者の話では食べ物もドリンクも少なく，主要候補の挨拶が済んだらもう十分という感想が圧倒的であった。「勝者」となったAfDやFDPのイベントは，もっと違う盛り上がりを見せていたことであろうか。

筆者の印象に強く残ったのは，視察研修の最初に行ったラインラントでの街宣活動（Straßenwahlkampf）見学である。参加者は数名のグループで一人の候補者の選挙活動に同行する。筆者はボンでSPDのウルリヒ・ケルバー（Ulrich Kelber）候補の半日を追った。ケルバー候補は2002年の初当選以来，同市の小選挙区から選出されている現職議員で，政務次官や党会派副会長も務めた中堅政治家である。「今日はそれほど忙しくない」という同候補は，午前中だけで地元スーパー前の選挙スタンド，SPD市議が役員を務める市民農園，街角の「みんなの本棚」（市民が古本を交換できる施設）設置開幕式と3つの日程をこなした。

ケルバー候補の選挙スタイルは身軽かつ気さくで，日本の街宣活動の物々しさとは対照的だった。秘書は同行せず，自身の名前と写真が貼られたコンパクトカーを一人で運転する。スマートフォンで遊説先の写真を撮影してその場でFacebookにアップ，投稿へのコメントにも自ら返信する。選挙スタンドでは通行人に気さくに話しかけ，世間話のように政治を語り合う。ケルバー候補が長年ボン市を代表する地元名士であるせいか，有権者側も同候補とごく自然に交流していた。

街宣活動で興味深かったのは，日本では禁止されている「モノを渡す」行為が，候補者と有権者のコミュニケーション手段として重要な意味をもっていたことである。ドイツの選挙では，ボールペン，色鉛筆，パズル，果物やグミなどのさまざまなグッズが配られる。ベルリンのSPD選挙集会では耳栓やコンドームもあった。スーパー前でカート用のコイン，親と手をつないだ子どもには風船を「これ，どうぞ」と渡すことがきっかけで会話が始まる。日本では，有権者が路上で候補者と積極的に交流したがることは人気政治家以外あまり見られないが，ドイツではグッズ欲しさに自ら候補者に近づく市民も多い。ケルバー候補は市民農園で野菜の苗を配るなど，モノの魅力を大いに活用した選挙戦略を展開しており，「日本ではうちわを配っただけで法律違反になる」と話したら大変驚かれた。同候補は今回の選挙でも小選挙区で当選を果たし，SPDが苦戦する中で堂々の勝利を挙げた。

街宣活動のほか，ライプツィヒで労働組合が主催した市民向けイベントも印象的であった。参加者は雇用や介護などテーマ別のテーブルに分かれて座り，そこを地元選挙区の候補者が一人ずつ巡回して，制限時間内で各テーマについての見解を伝え，同席の市民と意見を交換する。棄権防止目的も兼ねた催しであるせいか，テーブルには今回が初めての投票と思われる若い世代が目立ち，教育問題や政治倦厭について熱心に質問していた。

⑵　政治家・政党スタッフ・メディア関係者との面会

選挙視察団は，全日程を通じ，のべ20名以上の政治家や政党選挙スタッフと面会した。面会は，連邦議会選候補者の単独会見や複数名での討論，ランチの席に関係者を招いての会食など，さまざまな形をとった。皆に評判が良かったのは，ハレ市庁舎で行ったSPDのカランバ・ディアビー（Karamba Diaby）候補との会見である。同候補はセネガル出身で，DDR時代にハレ大学に留学し，その後帰化して政治の道に進み，現在は連邦議会議員としてザクセン＝アンハルト州の民主化のために働いている。外国系住民が少なくAfDの勢力が強い旧東独で，アフリカ系ドイツ人として地域社会の発展に尽力するディアビー候補の誠実な人柄は，一同を魅了した。同候補は今回の選挙でも比例代表で再選を果たした。

旧東独では，ライプツィヒにおいて，AfDザクセン州副代表ジークベルト・ドローゼ（Siegbert Drose）候補とも会見した。18名の「知独派外国人」に囲まれた同候補は，終始こわばった表情で，選挙戦略，ムスリム系マイノリティ，歴史認識等のテーマについて次々と出される質問に曖昧な回答を繰り返した。筆者は「まあこんなものだろう」との感想を持ったが，ドイツ滞在歴の長いインドやトルコの同僚たちは「失望した」「こんな人がドイツを代表することになったら，それはもはや『私の国』ではない」と口々に嘆いていた。AfDはザクセン州で第一党となり，ドローゼ候補も比例代表リストから当選した。

メディアについては，『フランクフルター・アルゲマイネ』本社と『デア・シュピーゲル』首都事務所を訪問し，編集者と意見交換の機会を得た。前者では今回の選挙にとどまらず，メディアの政治的役割全般へと話題が広がり，ネット時代の印刷メディアのあり方やフェイクニュースへの対処などについて，ジャーナリズムの現場が模索するさまを窺うことができた。後者ではクリスティアーネ・ホフマン（Christiane Hoffmann）副所長が選挙戦を総括した。ホフマン副所長は，取材の中でメルケル首相への反発の高まりを実感した，だがAfDの躍進は民主主義の危機ではない，今後の報道ではAfDを他政党と同じように扱うつもりだと淡々と語り，その冷静な態度は視察団一同の記憶に深く刻まれた。

(3) テーマ別レクチャー

西ドイツ地域とベルリンでは，選挙の主要テーマについて，研究者や現場の政策担当者，市民団体関係者などから直接話を聞く機会を得た。多くの場合，異なる立場を代表するスピーカーが複数招かれ，パネル形式で報告と討論を行った後に視察団メンバーが質疑を加える形式であり，専門家側も含めた全員が知識や見解を交換できる工夫がなされていた。テーマは右翼ポピュリズム，難民，社会政策，トルコ，デジタル化，外交，ソーシャルネットワーク，教育，ヨーロッパと多岐にわたり，大学の集中講義のような濃密さであった。最後のヨーロッパに関するセッションには，テレビの選挙解説でも有名なデュイスブルク大学のカール＝ルドルフ・コルテ（Karl-Rudolf Korte）教授も駆けつけた。コルテ教授は，難民危機がもたらした「異文化の過度の影響（Überfremdung）」の感覚が広がる中で，今日ドイツの政治は大きく変化していると述べ，視察全体を総括する役割を果たした。

4　日本人の目から見たドイツの選挙と政治

帰国後の10月16日，東京ドイツ文化センターにて，DAADとドイツ語圏日本学術振興会研究者同窓会の共催で「日本人の視点で連邦議会選挙をふり返る」趣旨の催しが行われ，筆者も研修の帰朝報告を行わせていただいた。その際，視察の中でドイツの選挙と政治について抱いた「気づき」として，以下の4点を挙げた。

(1)　政治家と有権者の関係。ドイツの選挙戦，とりわけ街宣活動や市民向けイベントを視察して強く印象に残ったのは，政治家（候補者）と市民の距離の近さである。日本の多くの有権者にとって政治家は遠く離れた異世界の存在であるが，ドイツでは既成政党への失望感は高まっているものの，政治家は一般市民が気軽に話しかけ，自分の問題を訴えられる対象である。その際，選挙スタンドで配られるモノが対話を媒介する役割を果たしているのも，日本にはみられない特徴であろう。

(2) 若い世代の政治参加。視察全体を通して，政治にコミットする若者を数多く目撃した。選挙戦のサポーターやボランティア，イベントへの参加など，その形はさまざまであった。ケルバー候補の選挙スタンドを手伝っていた青年は，「SPD の党綱領を読み，内容に共感したので，週末に時間があると地元候補を応援するボランティアをしている」と笑顔で話していた。スポーツやショッピングと同じような余暇のひとつとして政治がある，そのような身軽な関わりかたは，日本の若い世代の平均的感覚と大きく異なっている。

(3) 討論の文化（Diskussionskultur）。政治に限らないが，ドイツでは議論や討論の実践が日常生活の一部になっている。オープンな討議はすべての参加者を利すると考えられており，異なる意見のぶつかり合いも推奨される。社会の発展も個人の成長も，多様なものが交流する中で実現されるという思考は，「出る杭は打たれる」「空気を読む」といった日本社会に支配的な風潮と対照的である。

(4) 祝祭としての選挙。ドイツでは，日本のように首相が気ままに議会を解散できない。連邦議会選挙は，オリンピックやワールドカップのように4年に1度めぐってくる「民主主義の祭典」である。各政党や候補者は，選挙プログラムや広報戦略を丹念に準備し，選挙戦では政策論争がメインとなる。開票の夜にはパーティーを開き，勝者も敗者も皆が努力をねぎらい合う。ドイツの選挙が祝祭ならば，日本の選挙はさしずめ天災である。台風のように突然発生しては列島を襲い，あっという間に去って行く。

以上は，在日ドイツ人を主体とした聴衆に向け，日本人の視点から印象深かったこととして筆者が述べた内容であるが，他国からの研修参加者，とくに非欧米地域からの同僚も，折々に(1)〜(4)と共通する感想を表明していた。これらの「ドイツ的特徴」の規定要因を論じることは本稿の趣旨をこえるが，重要なものを挙げるとすれば政治教育と政治の安定性の2点であろう。いずれも戦後の西ドイツ時代から，歴史の教訓をふまえて追求されてきたことである。今回の連邦議会選挙では右翼勢力の躍進が話題をさらったが，外国人の視点から見る限り，戦後ドイツの民主主義構築プロジェクトは一定の成果を挙げているといえるのではないだろうか。

5 おわりに：文化交流事業としての選挙視察研修

筆者の体験したDAAD選挙視察研修について，概要と主要な活動，参加者としての「気づき」をふり返った。最後に，当研修が文化外交（対外文化政策 auswärtige Kulturpolitik）ないし文化交流のプログラムとしても重要な意義をもつことを強調したい。

今回の研修に参加した18名のメンバーの間には，11日間寝食を共にし，ハードな日程を乗り切る中で，強い友情と連帯感が生まれた。食事や移動の際にも，ド

イツや互いの国の政治や社会について意見交換を重ね，中身の濃い交流を行うことができた。主催者のDAADにとって当事業は，「知独派外国人」にドイツの民主主義を広報する意味をもつだけでなく，ドイツ研究者の国際的人脈をつくり共同研究や大学間協力の輪を広げる効果も期待できる。過去の研修参加者がその後どのような研究・教育・交流の活動を行ったか，その展開をフォローできれば，当事業がもつ多様な意義が明らかになるであろう。

視察研修への参加機会を与え，貴重な資料を回覧して下さったDAADの皆様に心から感謝申し上げるとともに，今後，選挙視察研修事業の歴史をさらに詳しくひもとき，その展開と意義を検証する機会を持ちたいと願う次第である。

＊ DAAD選挙視察研修事業2017の公式情報および記録は，以下のリンクを参照。
https://www.daad.de/der-daad/daad-aktuell/wahlbeobachter/de/
このほか，DAAD JapanのFacebookページにて，筆者が研修中に綴った毎日の記録を「ドイツ選挙日記」として掲載していただいた（2017年9月16～26日付け投稿，日独二言語）。関係者の皆様のご厚意とご助力に重ねて深謝申し上げる。

（後記） 本稿を執筆した2017年秋以降，連邦議会選挙の結果を受けた連立交渉は予想を超えて難航し，再選挙の可能性も取り沙汰された。こうした選挙後の展開は，ドイツの「機能する民主主義」のイメージを少なからず損なう効果をもたらしたといえる。詳細は改めて別の機会に検討したい。